2022 新年号

まつさか歴史文化かわら版

No.12

旧長谷川治郎兵衛家庭園の池で泳ぐカモの親子たち

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウィルスの猛威に翻弄された1年でしたが、2022年という新しい年を迎えるにあたって、本年こそ真の意味でコロナが収束して、平穏な日常が戻って欲しいものと心から祈るものです。

旧長谷川治郎兵衛家では、昨年末から何羽かのカモたちが庭園の池を訪れ、元気に泳ぎ回っています。カモたちは子育てを終え、春には旅立ちます。写真は、昨年春に撮影した親子のほほえましい水上散歩の様子。彼らの世界にもきっと厳しい生存競争があるのでしょうが、それを乗り越え、こうして平和に泳ぐ姿を見ると心が和みますね。

私たちもこの元気をもらって、本年も郷土の歴史文化を守り育んでいきたいと存じます。どうぞこの1年もよろしくお願いいたします。

今回の展示のみどころ！

旧長谷川治郎兵衛家　長谷川家の女性

令和3年12月22日(水)～令和4年3月13日(日)

長谷川家を含む伊勢商人の経営方法は、当主が本宅に居住しながら店々の人事権を掌り、遠く離れた出店の経営一切は支配人に任せるというものでした。こうした店の経営や労働力を担っていたのは男性であったこともあり、女性について言及されることはほとんどありませんでした。しかし、長谷川家に女性が居なかったわけではありません。

そこで本企画展では、長谷川家に嫁いだ女性から長谷川家へ奉公した女性まで、それぞれの女性に焦点を当て、長谷川家の女性はどのように過ごしていたか、その一端をご紹介します。

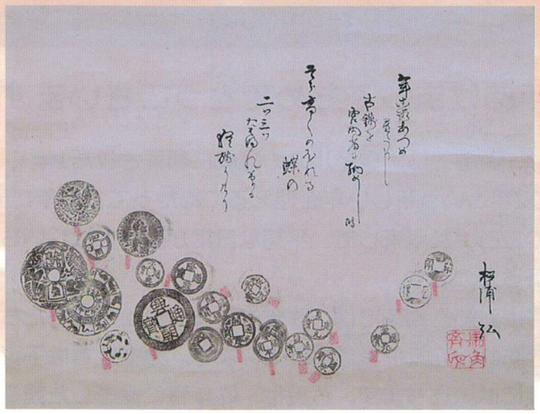
〔御所車文打掛〕大正7年（1918）頃
福三郎（12代元収（もとかず））妻 ミツの婚礼道具。紫繻子（しゅす）地に御所車や四季折々の草花を刺繍したもので、裾に綿を入れた仕立てとなっている。

旧小津清左衛門家　松阪ゆかりの文人たち

令和4年1月12日（水）～4月3日（日）

松阪は、戦国時代の武将・蒲生氏郷(1556～95)により開かれた町です。参宮街道を引き込み、楽市楽座を布告して商人を集めるなど蒲生氏郷が打ち出した政策により、松阪は商人のまちとして発展しました。お伊勢参りの盛況と相まって、街道を通して江戸や京都・大阪の情報が大量に入り、また多くの歌人・俳人・絵師・書家などが訪れました。その結果、詩文や書画など風雅の道に心を寄せる文化が醸成され、本居宣長をはじめとする多くの文人を輩出しました。

本展では、これら松阪城下と周辺地域ゆかりの文人たちの作品をご紹介します。



〔「古銭摺本賛歌」松浦武四郎賛〕明治期
古銭を拓本に取り、それに松浦武四郎が和歌を添えたもの。

原田二郎旧宅　松坂城代与力 服部中庸の学問

令和3年12月15日（水）～令和4年4月17日（日）

紀州藩士の服部中庸（なかつね）（1757～1824）は、江戸時代を代表する松阪の国学者 本居宣長（1730～1801）の古学を継承した数少ない高弟の一人です。中庸は松坂城内の鷹部屋跡（市民病院裏）の城代組同心屋敷に生まれ、号を楓蔭（ふういん）などと称し、29歳で宣長に入門しました。その代表作である『三大考』は、宣長が賞賛し『古事記伝』巻17の付巻として刊行しました。

本展では、『三大考』の稿本類や詠草、宣長が中庸へ贈った懐紙などを通して、「国学者 服部中庸」をご紹介します。

〔「楓陰（ふういん）」華岡青洲筆〕江戸時代後期

世界で初めての全身麻酔による乳ガン摘出手術に成功した江戸時代の外科医 華岡清洲が中庸の号「楓陰」を揮毫したもの。

トピックス

11月6日から21日にかけて、(有)松本紙店主催、松阪市、NPO法人松阪歴史文化舎共催で、「第1回 松阪カルチャーストリート」が開催されました。これは松阪の魅力を芸術で再発見し、楽しむイベント。メイン会場の旧長谷川治郎兵衛家と旧小津清左衛門家、原田二郎旧宅のほか7つのサテライト会場に、地元ゆかりの作家のみならず県外の作家の絵画や彫刻等が展示され、来場者に松阪の歴史的建造物と芸術のコラボレーションを楽しんでいただきました。

11月27日と28日、豪商のまち松阪プロモーション実行委員会により豪商のまち松阪キャンペーン プレイベントとして、旧長谷川治郎兵衛家庭園ライトアップ試験点灯が行われました。

広大な庭に幻想的に浮かび上がる紅葉や水面に映り込む赤と黄の葉の色の美しさに参加された皆さんは大変満足されているようでした。

11月7日の夜、旧長谷川治郎兵衛家にて、尺八や箏（そう）など和楽器の演奏会を催しました。尺八演奏は、辻井甫山さん、箏と三弦は東海かおりさん。歴史ある大正座敷に流れる和楽器が奏でるたおやかな音色に来館されたの皆様も心からリラックスし楽しんでおられる様子でした。

～松阪と大和初瀬をつなぐもの～

旧初瀬街道の松阪六軒から大和初瀬まで、およそ14里17町（約57㎞）。ここ初瀬の長谷寺本堂に安置された青銅製の大香炉は、松阪本町の紙問屋・小津家６代長郷が宝暦４年（1754）に寄進したものです。この大香炉の縁には十二支の彫刻が施されていましたが、残念ながら現在はそのほとんどが失われています。小津家11代長柱の嘉永2年（1849）11月の日記には、十二支の内の巳・午・未の３つが損失したため、京都の職人に細工を依頼したところ、良い出来に仕上がったと記しています。大香炉に心を配る長柱の信仰心が窺われる興味深いエピソードです。長柱の先々代9代長澄の妻・久満は、長谷寺の子院・能満院の海如に帰依して多数の経典仏書を書写しました。海如は梵字に関する学問である悉曇学の研究者で、松阪魚町の木綿問屋・長谷川家8代元貞にも真言密教の伝法を授受しました。旧長谷川家には海如筆の梵字扁額が残されており、その裏に元貞自ら海如を「高徳の御僧」と評しています。

【長谷寺大香炉】

【能満院】

長谷寺の向いにある輿喜山の中腹には、菅原道真（天神）を祀る輿喜天満神社が鎮座しています。松阪本町の国学者・本居宣長の『菅笠日記』にも登場する神社ですが、それからおよそ100年後、松阪小野江の探検家・松浦武四郎は、輿喜天満神社をはじめ全国25の天満神社を巡って鏡を奉納しました。輿喜天満神社では武四郎の遺徳を偲ぶため、毎年5月7日に「松浦武四郎公祭」が執り行われています。

ちなみに菅原道真の先祖は野見宿禰とされ、当麻蹴速と角力をとるために出雲国（島根県）から招かれ、埴輪の原点となる土作りの人形を考案したとの伝承があります。これが、長谷寺参りの土産物・大和出雲人形の始まりともいわれています。（中戸）

【大和出雲人形「俵ねずみ」】

歴史文化3施設のご案内

【開館時間】9：00～17：00
（16：30までにご入館ください）
【 休　館 】月曜日（祝日の場合は翌日）
／年末・年始

【連絡先】
◆**旧長谷川治郎兵衛家**
Phone：0598-21-8600
◆**旧小津清左衛門家**
Phone：0598-21-4331
◆**原田二郎旧宅**
Phone：0598-23-1656

発行　NPO法人松阪歴史文化舎
〒515-0082 松阪市魚町1653
Phone: 0598-21-8600
E-mail　info@rekishibunkasha.onmicrosoft.com
HP　https://matsusaka-rekibun.com/